コントの社會連帶思想（三）

米田庄太郎

さきに述べし如く、コントが連帶と云ふ語を、始めて或は始めて盛んに用ひ出したのは、少なくも余の調らべた處では實證哲學講義第四卷に於てゞある。尙ほ同卷中彼が始めて此の語を用ひて居るのは百四十四頁に於てゞあつて、而して夫れは科學間の相互依存の關係或は合致の關係を表示する爲めに用ひられて居る。次に彼はアダム、スミスの經濟學を論評するに當て、矢張り同樣な意味にて、同卷二百十六頁に於て連帶的（Solidaires）と云ふ語を用ひて居るが、然るに同二百十九頁に於ては、始めて此の語を科學間の關係以外のものを表示するに用ひ「必然的に連帶的としての種々なる人間の利益（アンテレ）」云々と云ふて居る。夫より彼は社會靜學の概念を論するに當つて、同二百五十九頁に於て、連帶を明らかに、社會的連帶の意味に用ひて居る。

「靜學的社會學は、社會體系の一切の諸部分が、相互に他の上に連續的に及ぼす相互的動反動の、實驗的にして又論理的なる實證的研究を、永久の目的となさねばな

らぬ。……されば政治學(社會學)の此の第一の方面(社會靜學)は今日の哲學的習慣に反して、無數の社會的要素の各々が、最早一の絶對的な獨立な仕方で考へられなくなり、一の基本的連帶が斷へず內部的に夫れを結び附けねばならぬ總ての他のものと相關係するとしてのみ常に考られることを、明らかに必然的に假定するのである。」

尙ほコントは矢張り社會靜學の概念を論述する中に、連帶或は連帶的と云ふ語を左の諸々の場合に用ひて居る。

「社會有機體の一切の可能的なる諸方面の間に存する、かゝる一の基本的連帶云々」p. 261.

「各科學或は各技術の諸分枝間の甚だ親密なる連帶云々」p. 261.

「一層廣い考察によりて、吾人は科學の體系を技術の體系に結び附ける處の、必要缺く可からざる連續的關係、をも亦同樣に考へる。但し吾人は主題の性質が明らかに要求する如く、連帶が間接的になるにつれて强さの度を減ずることを、常に假定せねばならぬ。」p. 262.

「基本的連帶が尙ほ直接に原理に於てゞはないが、現實には少なくも、深く見損な

はれ、更に根本的に無視されてさへ居る唯一の本質的な場合」p. 262.

「嚴密に云ふ政治的諸制度間に存する一定の部分的連帶」p. 264.

「政權と私權との間の必然的なる一の恒定的連帶」p. 265.

「啻に一方に於ては嚴密に云ふ政治的制度及び社會的風習、他方に於ては風習及び觀念或は思想が、斷へず相互的に連帶的であるのみならず、云々」p. 268.

「實際に於て、通俗の謬見は一般に立法家に、豫め充分なる權威を具有すると云ふ唯一の條件の下に於て、余輩の考へる必然的調和を突然破壞する永久的能力を認めて居る。是れ疑ひもなく、本質的には此の連續的連帶を全く否定することゝ同樣である。」p. 269.

「社會靜學に於ては此の普遍的なる社會的連帶の母觀念は前卷(生物學)に於て、生物の研究に著しく特有なものとして確立された一の基本概念の、不可避的な結果及び不可缺的な補充となる。……吾人は、實際に於て何等かの體系の存する何處に於ても、一定の連帶が存在せねばならぬと云ひ得る。」p. 279.

「連帶及び合致の科學的概念が、其の必然的なる普遍性に拘らず、夫れが常に本質的に適合するのは、特に有機的諸體系である。……かくて例へば動物的合

致は植物的合致よりは一層完全であり、同じ理によりて動物的合致は、動物性が人性に於ける其の極大にまで高まるにつれて明らかに發達する。最後に人間に於て神經系統は何れの他のものよりも、生物學的連帶の主要なる座となる。然るに今政治哲學の今日の精神は一切の諸異の社會的方面の間に存する此の根本的連帶を、本來無視する處で云々」p. 280.

「此の必然的連帶に從へば何かの方法によりて豫め探究されたる何れの社會的現象も、夫れが他から孤立して考へられる以上、有益に科學の中に取り入れられないであらう。」p. 283.

「一切の社會現象の特質的な連帶の力によりて云々」p. 284.

「連帶が著しくは現はれず、隨ふて對象の研究に及ぼす影響の弱かる可き無機的哲學に於ては云々」p. 286.

「社會學の對象の親密なる連帶は云々」p. 288.

以上引用せる諸文句は、コントが實證哲學第四卷第四十八講中社會靜學の概念を論するに當つて連帶又は連帶的と云ふ語を用ひて居る總ての場合であるが、其れによりて吾人はコントの連帶と云ふは如何なるものであるかを、大體上學ぶことが出

來るのである。尙ほ注意す可きは、コントは社會靜學に於ては連帶を合致（Consensus）と、同じ意味に用ひて居ることである。彼は此處では連帶及び合致の兩語を或は併用し、或は換用して居るので、既に以前から合致と云ふ語を用ひて居る以上、別に新に連帶と云ふ語を用ひる必要はない樣に思はれる。コントが實證哲學第四卷から盛んに連帶と云ふ語を用ひ出した理由はさきに述べし如く不明である。とにかく彼が連帶と云ふ語を、殊に多く用ひて居る社會靜學概念論中に於ける總ての場合を上に列擧せし如くに蒐集して、之を總觀すると、彼の連帶の概念の內容は左の如くに分類されると思ふ。

（一）諸科學間の連帶或は合致
（二）各科學と技術との連帶或は合致
（三）各科學及び各技術の諸分枝間の連帶或は合致
（四）宇宙間の一切の現象間の連帶或は合致
（五）各部類の現象內の諸部分間の連帶或は合致
（六）有機體の諸部分間の連帶或は合致
（七）社會の諸部分間及び社會生活の諸方面間の連帶、或は合致

（八）文明狀態と政治組織との連帶或は合致
（九）政權と私權との連帶或は合致
（十）靈權と俗權との連帶或は合致
（十一）總ての體系內の諸部分間の連帶或は合致

右の中で最後の（十一）は、恐くはコントの連帶概念の最とも包括的なる意味を表示するものと思はれる。要するに社會靜學の概念を概論するに當つて、コントの用ひて居る連帶概念の最とも一般的なる意味を約說すれば、夫れはつまり一の體系をなす諸要素の間に或は一の體系の諸部分の間に存立する相依不離或は相互依存の關係である。而してコントは更に實證哲學第四卷第五十講「社會靜學の豫備的考察、卽ち人間社會の自發的秩序の一般的理論」(Considérations préliminaires sur la statique sociale, ou théorie générale de l'ordre spontané des sociétés humaines) に於て特に社會連帶の概念を詳しく論述して居るのであるから、是れより更に同講に就て特に彼の社會連帶の概念を研究せんとするのであるが、尙ほ夫れに先たち彼は社會靜學の概念を概論すると同時に、又社會動學の概念を概論して居る第四十八講中其の社會動學の本質を論ずる部分に於て連帶と云ふ語を如何なる場合に用ひて居るかを調らべて見たいと思ふ。

蓋し夫れはコントの社會連帶思想は單に所謂「空間に於ける社會連帶」(la solidarité sociale dans l'espace)を意味するだけで、所謂「時間に於ける社會連帶」(la solidarité sociale dans le temps)を意味しないものであるか、或は之をも含めて意味するものであるかを研究する爲めに、甚だ重要であるからである。

今第四十八講社會動學の概念を概論する部分に於て、コントが連帶と云ふ語を用ひて居るのは、只左の數ヶ所に於てだけである。

「假令社會的連帶の基本的法則は、殊に運動の此の狀感(社會的運動)に於て證明されるとは云へ云々」p. 296.

「既に社會靜學に對して、一切の社會的諸要素の間に確認されたる基本的連帶云々」p. 299.

「社會的連帶及び人類進化の實證的研究に於て云々」p. 313.

「一の廣大にして永久的なる社會的統一體の種々なる個人的或は國民的機關は、一の親密なる又普遍的なる連帶によりて斷へず結合されて云々」p. 327.

右に列擧せる場合に就て考へるに、コントは社會現象の諸部類が相互に作用し相互的影響の下に於て時間的に進動する事をも、連帶と見て居る事は明らかである。

かくて彼の連帶概念は、或意味では「空間に於ける連帶」と共に「時間に於ける連帶」をも意味するものと見做し得られるが、併し夫れは嚴格なる意味の「時間に於ける連帶」ではない。矢張り根本的には「空間に於ける連帶」にして、只之を時間的に延長しただけに外ならぬ。嚴密に云ふ「時間に於ける連帶」とは、前の狀態と後の狀態との間の不可離的連結、卽ちコント自身の云ふ、世代の影響或は前代が後代の上に及ぼす影響の如きものでなければならぬ。而して世代間のかゝる連結は、コントの大に重要視して居るものであることは明白である。否な彼は此の思想を、彼の時代に於ける彼の哲學の根本的一特徵とさへ見て居たのである。只此處に余の問題とするは、彼の此の如き時間的連結をも連帶と稱して居たか、どうかと云ふ事である。而して余は是れまでに列擧せる總ての場合に於て見られる如く、コントは少なくも實證哲學講義第四卷に於ては、連帶を根本的には「空間に於ける連帶」の意味に解して居たと思ふのである。しかも時には「時間に於ける連帶」をも含ませて居たかと思はれる場合も見出される。夫れはコントが同第四十八講に於て社會動學の概念を概論した後、更に研究方法を論じて居る中に、稍々明らかに見出されるものである。但しコントは研究方法を論ずる中に連帶或は社會連帶と云ふ語を用ひて居るのは左の數ケ所である。

「社會現象の靜學的觀察は、社會的連帶の本質的法則に從ふて云々」p. 337.
「さほどに著しく複合せる社會現象の連帶或は繼續の眞實なる法則云々」p.340.
「此の如く連帶又は繼續の合理的見地に從ふて探究されて、社會現象は云々」p.341.
「人々は時として人類の總體を、全地球上に擴まる廣大なる水螅或は珊瑚蟲の一種に比した。併し此の比喩は吾人の社會的連帶の甚だ不完全なる哲學的評價殊に水螅或は珊瑚蟲に特有なる生存の仕方に關する甚だしき生物學的無智を示すものである」此の比喩はつまり有意的及び任意的なる團結を、無意的及び不可溶的結合 (une participation involontaire et indissoluble) に接近させることになる。かくて反要素が其の特有の原本性に拘らず、常に相互的に影響する一體系を、本質的に正諸對な一體系、卽ち諸部分が不可離であるが、決して直接には何等の相互作用をもなさない一體系に同化させることになる。」p.p. 351 et 352.
「此の歷史的分析は、其の性質上、只動學的社會學にのみ適合するが如くに見えるが、しかも夫れは社會學の諸部門の完全なる連帶によりて、其等の諸部門の差別なしに、社會學の全體に推し及ぼされることは、爭はれない。社會動學は結局社會學の主要目的物となるものであるが、しかも社會靜學は根本的には社會動學と合理

的には不可離的なものである(兩者の理論的區別が眞に有益であるに拘らず)。是れ存在の法則は、運動の行なはれる中に、殊に著しく現はれるからである。」P. 361.

「社會的諸要素が必然的に連帶的で不可離であることは云々」P. 362.

右に擧げし場合に於ては、連帶或は社會連帶と云ふ語は、矢張り「空間に於ける社會連帶」の意味に用ひられて居るのであるが、然るに左に擧ぐる場合に於ては、社會連帶と云ふ語は「時間に於ける社會連帶」の意味を含んで居る樣にも思はれる。此の主旨を明らかにする爲めに其の個所を稍々詳しく引用して置く。

「最後に此處に吾人の注意す可きは、實際的見地の下では、嚴密に云ふ歷史的方法が社會的研究に於て一般に用ひられるに至ると、夫れは又社會的情操を自から發達させると云ふ有益なる性質を有することである。但し歷史的方法が自から社會的情操を發達させるのは、是れ最とも遠い過去の出來事さへも、夫れが吾人自身の文明の漸次的發現の上に及ぼせる現實なる影響を憶ひ起させることによりて、今日吾人に直接な興味を起させる處の、其の種々なる人類的出來事の必然的連結を、直接に又連續的に明證するからである。コンドルセーの美はしき注意に從へば、今日教養ある何人も例へはマラソン及びサラミスの戰爭が、人類の現實なる運

命に對して生せる重大なる結果を、直ちに觀破することなしに、其等の戰爭に就て考へることは出來ないであらう。本卷の殘りの總ての部分に於て、當然明白に、或は殊に暗に、斷へず適用されるであらう處の、歷史的方法の右の性質に就て、此處に特に主張する必要はあるまい。其の如何なる形式的證明も、社會的諸時代の密接なる一般的從屬を明白ならしめる歷史の自然的性能を確立する爲めに、此處に必要とならないであらう。さはれ此の問題に就て、此處に注意す可き一の重要なる事がある。夫れは右の如き社會的連帶の情操を、人間生活の何れかの敍述も總て自から惹起す可き、否な單なる小說さへも同樣に惹起し得る處の、其の同情的興味と混同してはならぬと云ふことである。此處に云ふ處の社會的連帶の情操は、夫れは或意味にては個人的となるが故に、一層深大なるものにして、又夫れは特に一の科學的確信から生來するものとして、同時に一層反省的なものである。」p.p. 364 et 365.

右に引用せる處によりて考ふれば、コントは「時間に於ける社會連帶」をも、彼の社會連帶の概念中に含ませて居る樣に思はれる。併し詳しく吟味して見ると、彼は此處には人間的出來事の必然的連結に就て、吾人の心に自から起る主觀的なる連帶感情

を說いて居るので、客觀的なる「時間に於ける連帶」を直ちに連帶と稱して居るのではないことが覺られるのである。尙ほ次頁に亘る同頁中の左の語は、一方に於てはコントは連帶を根本的には「空間に於ける連帶」の意味に解すると同時に、他方に於ては容觀的なる「時間に於ける連帶」を、彼の連帶概念中に含ませようとする傾向を示すものとして、興味あると思はれる。

「始めには選良の精神のみに保留されて居る處の、此の社會的情操の新しき形態は、其の後社會物理學の一般的結果が充分普及するにつれて、一般の有識者間に擴まり得るであらう。但し其の强さは減ずるであらうが。而して此の社會的連帶の情操は、人類統一の更により高尙な、より完全なる一概念によりて、人類の繼續的諸世代を、又同一の終極目的(其の漸次的實現は各世代から一定の明確な貢獻を要求する)の爲めに協働する者として指示する處で、同代の個人間及び國民間に存する習慣的連帶のより明白な、又より元素的な概念を、必然的に完成するであらう。總ての時代の人々を協働者と見んとする此の合理的傾向は、今や科學に於て漸く現はれて來た。それも只最とも進步せる科學に於てだけではあるが。而して歷史的方法の哲學的優勢は、此の方法を人間生活の一切の有り得る方面に適用させ

て、以て、始めて其の全發達を成就せしめるであらう。かくて社會の正常狀態には必要缺く可からざるものであるが、不幸にして今日形而上學的哲學によりて大に傷けられて居る處の、吾人の祖先に對する根本的尊敬が、熟考的評價によりて適當に保持されることになるのである。p. 375—376.

右の引用文によりて、殊に其の終りの文句によりて、コントの連帶概念は「時間に於ける連帶」をも實質上包含して居ると推定し得られないことはない。しかもコントは社會連帶の概念を根本的には「空間に於ける連帶」に就て立てゝ居ると思はれるので、此くて彼は更に第五十講「社會靜學の豫備的考察、或は人類社會の自發的秩序の一般的理論」Considérations préliminaires sur la statique sociale, ou théorie générale de l'ordre spontané des sociétés humaines) に於て社會連帶を詳しく論述して居る。それで余も是より同講に就て尙ほ彼の社會連帶の概念を、稍々詳しく論究したいと思ふ。但し彼は第四十八講に於ては、盛んに連帶或は連帶的と云ふ語を用ひて居るが、次の第四十九講「社會物理學と實證哲學の他の基本的分技との必然的關係」(Relations nécessaires de la physique sociale avec les autres branches fondamentales de la philosophie positive) 中には奇妙にも此語を僅か二三ヶ所に於て用ひて居るだけである。